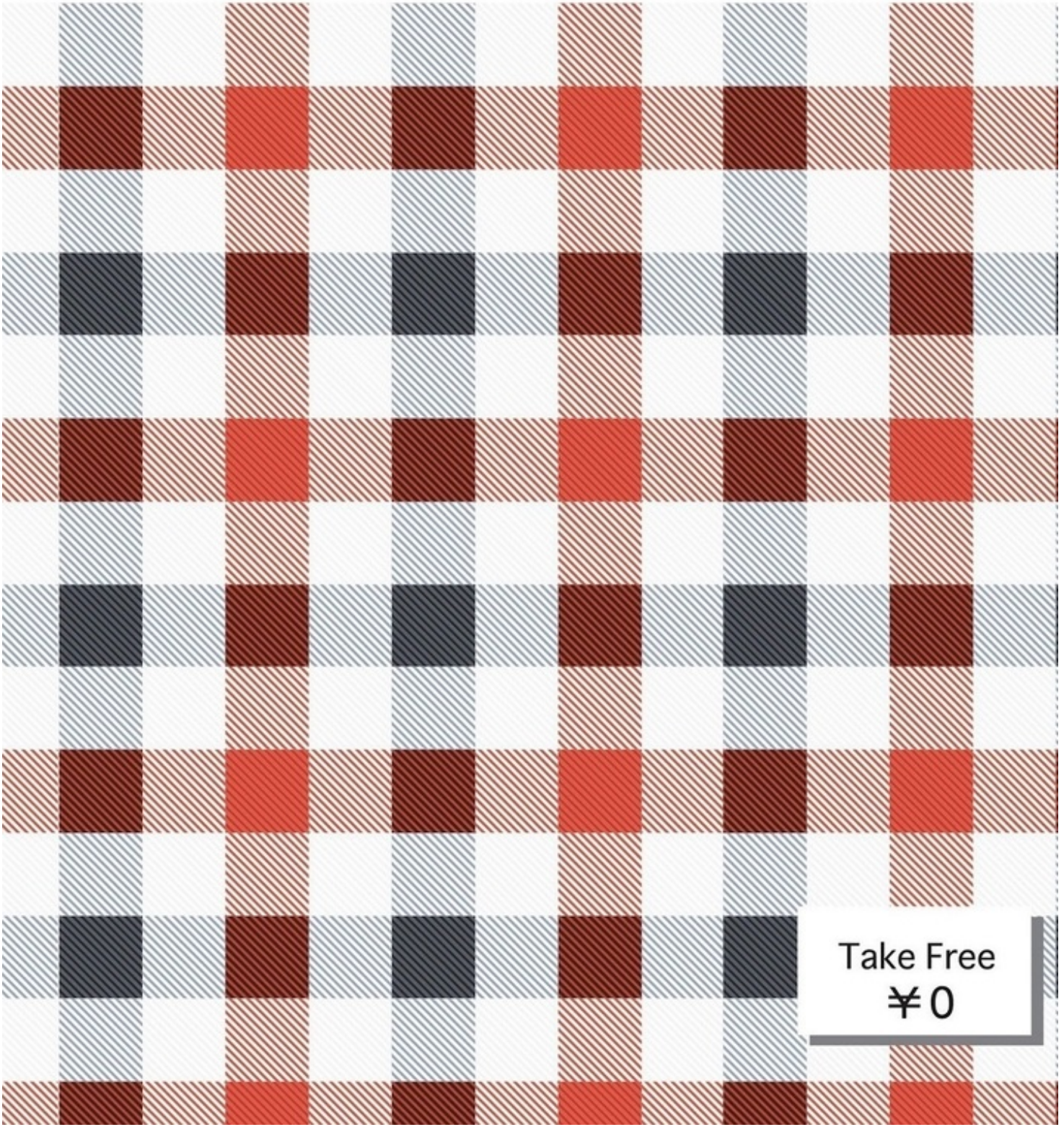
創星

SOUSEI Vol,18



創星

Vol,18

目次

CONTENTS

Vol,18

Step into Fascination　Side B	紫雲夜想	3
クラシック教養のお時間	天沼太郎	4
流星	松田定幸	6
あけ抜けない空に	甲斐聖子	7
衣空の映画放談	衣空	１２
タンカトイラスト	松田定幸	１７
旬を作る	To’ｓ job	２０
勝手にエッセイ　働く人へ	間々えいよ	２２
クラシック教養のお時間　番外編	天沼太郎	２４
丘と少年　――神さまへの捧げもの	川口修治	２７
エヘン王国の謎	一路真実	３２
編集後記		３９

星屑書房 STARDUST BOOKS

フリーペーパー『創星』のバックナンバーはwebで読めます。
お問合せは、ホームページもしくはメールでどうぞ！
https://stardustbooks.jimdo.com/
stardustbooks.create@gmail.com

Step into Fascination Side B　紫雲夜想

Step into Fascination　　Side B

紫雲夜想

甘美なるこの響きは
君にまだ知られてはいない

闇の帳がおりた孤城に響く　チェンバロの音
今夜も僕は独りで踊る

束の間の楽しみである君からの手紙を読みながら
僕はまた微笑んでしまう

僕には僕の　君には君の
宝物を大事にしながら日々を泳ぐ

僕の夢と君の夢
この二つがほんの少しでも混ざり合う日は来るのだろうか

今夜も月が綺麗だ
どうか疲れた君にも今夜の月の光が降り注ぎ
よい夢がみられるようにと僕は願う

君がいつかこの城に来て
一緒に踊ることができたら
僕の知る限りの熱く甘い言葉で　君を魅惑へと引きずり込めるのに

そしたら　君は　どうなるだろう

君のその紅く染まった頬に手を伸ばす
僕の手は空を切る

おやすみ　そう言って僕は深い眠りに堕ちてゆく
君のことを強く想いながら

I’m fallen Angel who fights the darkness for you.

クラシック音楽教養のお時間

天沼　太郎

第18回　教養のお時間　ベルティーニの慰め

今回の話は、いつも以上に私事(わたくしごと)です。最初に誤っておきます。

先日 10 年近く飼っていたウサギを亡くした。ペットを飼うのは初めてのこと。飼い主を認識してるのかいないのか、自由気ままに振る舞うそのウサギ(ポロ吉)には楽しい記憶しかない。

体調がおかしくなってから、たった2週間で死んでしまった。これまた初めて失った家族の一員。死んでから数日間でポロのことを思い出す度に胸の奥にズシンと来る。その感情を抑えるべきなのか、訴えるべきなのか、しかし訴えようとして、とても言葉にならないその感情を、一体どう伝えるべきなのか、そのズシンを抱えてゆううつな日が続いていた。

そんなとき、ブルックナーの交響曲第7番を聴きたくなった。ブルックナーがワーグナーの死を予感しながら書いたという「死」と関係の深い音楽だからである。特にチャリビダッケがベルリン・フィルを指揮した巨大な演奏があり、それを聴けば、何かこの喪失感を多少和らげてくれるのではと思ったのである。いや、そこはクラシック好きの性で、今ならこの曲を心の底から共感できるチャンスと思ったせいもある。

甘かった。チェリビダッケの演奏は一つの世界であった。こちらの思いとは全く無関係に音楽が進んでいく。音楽はその圧倒的な偉容を私に指し示すばかり。演奏がひとつの世界を築いているわけで、それは芸術として文句なしに素晴らしいことである。誰にでもできることではない。しかし、である。その時の私にとって、その演奏は悲しさのお手本を示されているようなもの。私の個人的な感傷など入り込む隙間はない。

これではイカンと、別の CD を聴くことにした。正反対の演奏を聴くことで新たな発見をした経験があるので、チェリとは正反対と思われるロスバウトの演奏を聴いてみた。現代音楽*1 のスペシャリストで、その無味乾燥な演奏は狂気と紙一重。音楽は一瞬の停滞もなく、喜びや悲しみ、いや感情なぞは、人間に残された数少ない非論理的な動物的感覚とばかりに、あらゆるニュアンスを取り払われたすっきり非人間的な演奏。人間はここまで虚ろになれるものかと呆然となってしまう。

実際は、凄い演奏なのであろう。よくよく聴くだけの気力があれば、演奏の空虚さの中に人間感情の外形(抜け殻)を見出し、その形ばかりとなってしまった感情の欠落にため息をつく、そんな二重三重にひねった悲歌なのだと思う。けれど、その時の私に、とてもそんな回りくどい演奏につきあえるタフさはない。

さて、どうしようかというところで、目についたのが、ガリ・ベルティーニの演奏(ケルン放送響)。しばらく前に買った CD で、確かに演奏は良かったけど、あまり印象に残らず、棚の肥やしとなっていた CD。こういう演奏がいいのかもしれないと聴きだして、大変なことになってしまった。

話は少し戻る。ブルックナーの交響曲は、どれも人間世界を越えた世界を指向している。作曲家は、作品を作るといろんな人にその曲を献呈する*2。ブルックナーも同じようにいろんな人に献呈していき、なんと最後には神へ曲を献呈するに至った。神への献呈はさて置き、そんな風なので、ブルックナーの音楽はどれも抽象度の高い音楽である*3。メロディが美しいなので、聞きにくいことはないけれど、慣れない人に勧められる音楽ではない。そんな中で、この交響曲第 7 番第 2 楽

章は比較的具体的な音楽である。

主題が 2 つあり、最初に出てくる第1主題は、悲しみ音楽。ただ悲しいだけでなく、どこか密やかなところがある。次の第 2 主題は、過去のことを、それも楽しかった記憶を思い返す音楽。しかし、音楽に取り除くことのできない悲しみが目一杯詰まっている。こんな風にストーリーとして聴ける具体的な音楽である。

悲しいときに、それをダシに音楽を聴こうということが人として正しいことなのかどうなのか、それはもう私の業としかいいようがないが、ともかく CD を聴いてみた。

すると、それまで控えめと思ってきたベルティーニの演奏が、私の心にまるで寄り添うかのように流れてくる。音楽は近すぎず遠すぎず。私の心をかき乱すことなく、かといって素っ気なく勝手に流れていくこともない。そう、この音楽は私のことを理解し、ずっとそばにいてくれる音楽なのだ。

第 2 主題が始まる。音楽から、しばらく前のことが思い出される。と、どうしたことだろう、思い出していたポロの姿が、最初こそ生々しいものであったけれど、それがやがて記憶の中の情景となり、やがて過去の思い出としてすんなり心の中に入ってくるのだ。今の私は、死んだペットとともにあるのである。これが葬送というものなのかもしれない。

自慢にもならないが、私はこの歳になるまで、身近な人の死に目に遭ったことがない。亡くなった近親者はいるが、例外なく遠方に住んでいた。友人知人で亡くなった者も、みんな長いこと会っていない人ばかり。だから、大きな喪失感というものを知らずに 50 近くになってしまった。そんなわけで、死について書かれた作品を読んでも聴いても、どうにも実感が湧かない。遠くに引っ越して会えなくなることと、どこが違うのだろう？という感じである。

葬送曲についても、「死者を悼む音楽」というだけの理解で、それが何のためにあるのか、死が、そして死に別れることが、どれだけのことか、そしてそれを受け入れるとはどういうことなのか、もちろん、今回の体験でそれを完全に理解してしまったなどという気はないが、少なくとも、その一端を知ることができた。

村上春樹の「ノルウェイの森」に、「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」という一節がある。最初に見たときは、それっぽいなあと思っただけの言葉であったが――実際同じような言葉を別の作家の文章でも見た記憶がある――そう、人はその感情を、文章書きは言葉で、絵を描く者は絵で、音楽家は音楽で表現しようとするのだ。

音楽は、生きている者と死んでしまった者をつなぐことができる。

＊1　現代音楽:20 世紀中期頃から作曲されるようになったけったいな音楽。心地よいメロディーを手放し、聞き手に緊張を強いて覚醒を促したり、音楽の概念を破壊したりする。そのため、素晴らしい現代音楽は聴く価値があるが、そうでない音楽は･･･。
＊2　献呈する:　音楽を献呈されると、献呈された側は作曲者にお金を渡すのが習慣だったため、実際のところありがた迷惑だったそうである。
＊3　抽象度の高い音楽:　狩りを思わせる角笛トリオ(交響曲第 4 番の第 3 楽章)など、例外もある。

Meteor ／ SWALLOW

甲斐聖子（かいしょうこ）

「あけ抜けない空に」　3

どさくさに紛れ
泥水の中に消え
言葉をもぎ取られ
ら行をののしられ
制服をちぎられて
燃やされ消され
心が荒んでいく

いじめられ
気がふれて
焼け跡晒して
傷跡増やして
誰も知らないふり
ら行も捨ててしまおう
自由になりたい
一瞬だけそう思えて
時間が来たら
元通り
素通りかなぐり殴られる

「あけ抜けない空に」　4

朝もや
意識の飛んだ先に
朝もやが広がり
言葉の暴力が脳を破壊し
ぐにゃり
今朝もまた脳が垂れる音で目覚める
わたしの声は必要なくなり
首を何度もすりつぶして声を殺した
朝もやが広がる

望んでなどいない朝もやが
わたしの目の前でニタリ笑っている

「あけ抜けない空に」　5

手をつないでいた
手をつないでいたはずのあの子の手
ちぎれて赤い血さよならした
どこにも赤い糸など無く
夢の中のあの子
ただ笑って切り落とした手首
手首の切り口に僕が写り
無表情な僕は暗闇に消えるあの子を見ていた
僕もそのうちそちらに行くよなんて冗談めいて

衣空の映画放談

～レッツ・ゴー・トゥー・ザ・シネマ～

生まれて初めて、独りで映画を観に映画館へ行ったときのことはよく覚えている。中学生の頃、今は亡き中洲川端の宝塚会館へ、ヒュー グラント主演の「フォー ウェディング」を観に行った。初の独り映画デビューということで緊張したのだろう。上映時間を間違えてしまい、オープンしていない映画館の前で一時間ぼーっと待っていた。

恐らく「中洲川端の宝塚会館」と言ってピンとくるなら、三十代以上かギリギリ二十代後半くらいの方だろうか。宝塚会館は「スカラ座」「宝塚劇場」など複数の映画館を擁した建物だった。子供の頃「映画を観に行く」と言えば、多くは宝塚会館だった。アニメ三本立ての映画やウルトラマンの映画は宝塚会館で観たし（子供の頃は「女のくせに」とか言われるのが面倒で黙っていたが、「将来の夢はウルトラマン」というくらいウルトラマンが好きだった）、生まれて初めて観たレイトショー「ペット セメタリー2」もそうだ。若き日のエドワード ファーロングを観たくて、ホラー映画大嫌いな母が道連れにした。

今でこそ映画館はシネコンばかりになってしまったが、以前は中洲川端に宝塚会館や、現在も残る中洲大洋劇場以外にも映画館があった。他にも博多駅交通センターにあったシネリーブル博多駅（Tジョイ博多の開館と同時期に閉館）や、百道浜のＴＮＣ会館にあったシネサロンパヴェリア。天神には親不孝通りの地下にあったシネテリエ天神、現在福岡市内唯一のミニシアターであるＫＢＣシネマなど、個性豊かな映画館があった。現在ＴＯＨＯシネマになっているソラリアプラザの映

画館はソラリアシネマという名で、三つのスクリーンがあり、その内の一スクリーンは名画座だった。中洲川端の宝塚会館を引き継ぐ形で開館したＴＯＨＯシネマズ天神本館も、ビルの老朽化のため閉館してしまった。ホークスタウン福岡内にあったユナイテッドシネマは、ホークスタウンの営業終了と共に閉館したが、今年の十一月に再オープンするそうだ。それにしてもここ数年の福岡市の映画館事情、九州一の大都市にしては心細い状況である。

私はストーリーや出演している俳優、映像を観て映画を楽しむのはもちろんだが、「映画館に行って映画を観る」ことが好きなのである。家のテレビやＤＶＤでも映画は観るが、好きな映画は映画館に行って、大きなスクリーンで、日常生活を送る場所とは違う場所で観るのが好きなのだ。だからこそそれぞれの個性を持つ映画館が複数ある方が楽しみは増えるのに、映画館が減っていくとは淋しい限りである。

ところで二〇一八年は映画大豊作と言ってもいい時期で、上半期は毎週のように映画館（ほとんどＫＢＣシネマ）に足を運んでいた。中でも現時点どころか、人生のオールタイムベスト映画一〇本に食い込んだ映画がある。「彼の見つめる先に」というキラキラ青春映画で、この映画について語りたいことは限りなくあるのだが、今回はその話題ではないので置いておく。

天神のＫＢＣシネマで一週間限定上映だったこの作品を、一度観ただけでは飽き足らず、最終日に二度目を観に行った。本当に好きな映画は行ける限り映画館へ観に行く性分である。最高記録はぶっちぎりでマイケル ジャクソンの「THIS IS IT」の七回だ。「彼の見つめる先に」もできることならそのくらい映画館で観たかったのだが、何しろ上

映期間が短かった。ＫＢＣシネマでの二回が限界かと思ったが、隣県の佐賀にある「シアターシエマ」という映画館での上映が、ＫＢＣシネマの後に決定していたのである。

シアターシエマについては以前から噂には聞いていた。どこかで偶々見かけたフライヤーの印象が強かったのか、シアターシエマ＝チェコアニメだった。私の好きなミニシアター系の映画を上映しており、一度行ってみたいとは思っていたが、ライヴでは国境を越えたとはいえ、いくら何でも映画のために県境を越えるというのはどうなんだと二の足を踏んでいた。しかし「彼の見つめる先に」はどうしても映画館で観たいし、佐賀なら天神からバスで行けるしということで、思い切って越境シネマを敢行した。

佐賀までは天神から高速バスで一時間半程度、往復チケットならば二〇〇〇円以下で行ける。佐賀駅でバスを降り、徒歩一五分ほどのセントラルプラザの三階にシアターシエマはある。かつては佐賀セントラルという映画館だったそうだが二〇〇六年に閉館し、その後二〇〇七年にシアターシエマとして開館。三つあったスクリーンのうち一つは受付兼カフェスペースとなっている。広々していて、床にある段差やスクリーンなど、かつての映画館の面影を残すスペースにカウンター席とテーブル席。映画を観るまで時間があるときは、読書しながらお茶ができるように、たくさんの本も置かれている。映画、食事、ティータイムと、シエマに行けば休日一日過ごせるようになっている。

映画を上映する二スクリーンにはちょっと古い仕様の普通のシート以外に、色んな形のソファー席や、カフェスペースで買った飲食物を持ち込んで鑑賞できるようにテーブルも準備されている。

必要ならば自分の席の傍に移動できるフレキシブルな形態は実にありがたい。私は映画を観ながら物を食べる習慣がなく、肩こりが酷いのでいつも普通のシートに座っている（ソファー席だと背もたれが低くて肩が凝り、映画どころではなくなる）。肩こりが恨めしい、時にはソファー席で観たい。

そして印象に残ったのは食べ物の匂いである。映画がもうそろそろ終わるなという頃に、カレーの匂いがしたことに驚いた。映画館で食べ物の匂いがするというと、たいていポップコーンなのにカレーである。福岡から佐賀まで出かけて行って、昼食をとらずに映画を観始めて二時半ごろにカレーの匂いがしたのである。でも気が散るということでもない。しかしお腹は空く。映画が終わってカフェスペースですぐに食事ができるのは本当に有難い。結局食べたのはカレーではなく唐揚げ定食だった。かつて映画が上映されていた場所の、スクリーンの真横で食べる唐揚げ定食はとても美味しかったし、楽しかった。

もう一つ私の興味を引いたのは、カフェスペースにあるＤＪブースだ。ライヴのような音楽系のイベントは時々開催されているが、ＤＪイベントもあるのだろうか。ガブちゃんみたいにデヴィッド ボウイやベルセバの曲をかけるＤＪ（元ネタは「彼が見つめる先に」をご覧ください。もうすぐＤＶＤ出ます）が来るイベントが開催されるなら、泊りがけででも佐賀まで馳せ参じる所存である。いやそのようなイベントがあるなら、むしろ私がＤＪやりたいくらいである。

シエマで上映される映画は、福岡のＫＢＣシネマで上映された作品が少し遅れて上映されることが多いので、短期間の上映のためＫＢＣシネマで見逃した際にシエマへ行って観るという新たな選択肢ができた。「彼の見つめる先に」の時のように、

もう一度観たいと思ったときに行くのもいい。いやもう何も観たい映画がなくても、月に何度か金曜日の夜に開催される「夜シエマ」というカフェがバーに変身する夜にも行きたい。ＤＪブースが使われるイベントがあるかどうかは未確認だが、映画関連のトークイベントやライヴ、地元の占い師の先生による占い（収益金は災害支援活動へ寄付）も行われており、参加したいイベントも山ほどある。「映画のために越境？　いくらなんでもそれは……」などと思っていたほんの数か月前の自分は何と浅はかだったことか。

　最初にシエマを訪れたときに、スタッフの方に厚かましくも「創星を置かせていただけませんか？」とお願いすると、快く置かせてくださって心の底から感謝している。その時から絶対次の号でシエマのこと書く！と心に決めていた。「創星」を佐賀県近隣ではない場所で手に取って下さった方にはローカル過ぎる話で申し訳ないが、映画好きな方で偶々こちらに来る機会があったら、ぜひ佐賀のシアターシエマに足を運んでみてはいかがだろうか。

　余談ですが、まだ四歳が五歳の頃、「風の谷のナウシカ」を映画館で観ました。しかしそれがどこだったのかどうしても思い出せません。一緒に行った親は「センターシネマ」（現在ソラリアプラザ）だったような気がすると言いますが、はっきり思い出せないようです。もし当時の上映館を覚えている方がいらっしゃったら、私のツイッターアカウント（@sju7_fyra4_sju7）にご一報いただけると嬉しいです。

（了）

タンカトイラスト

―「月」と「花」の恋の歌―

松田 定幸

日輪に
恋慕を抱く　月光の
想い募れど
距離は縮まず

麗らかな
陽射しに背き
騒めいた
胸裡映して
舞い散る桜花（さくら）

旬を作る

旬を作ると云っても、畑や家庭菜園でその季節の野菜や果物を育てたのではなく錆びた鉄片を集め溶接して写真のような彫刻ともオブジェともつかないような立体作品を創った。これは何か。うん、一様「ラ・フランス」がモチーフ。そう見えれば嬉しいのですが。一様と云ったのは西洋梨にも２０品種くらいあるらしい。

もちろん、形も色も違う。其のなかの一つの品種。本物は色や形で他の品種と容易に見分けられるが、造形にすると、どれもこれも似たり寄ったり。どの品種を作ったのか、私の技術ではどうにも見分けられる程には作れない。観察を丹念し制作すれば、多少は品種の見分けもつく形を作れるのだろうが。まだまだ先の長い話である。

「ラ・フランス」は１０月中旬から店先に並ぶ、それを眺めていると色と云い、形と云い、自由気ままに凹凸を作り、綺麗な色彩を放ち、楽しげである。それを手に取り掌に包み込みモチーフの曲線を感じる。鉄のチップを溶接し、モチーフと同じ感触なるまでこの作業を繰り返す。根比べである。制作意欲が薄れたらジ・エンド。暫く、モチーフと造形した「ラ・フランス」を眺め、溜め息をつく。そしてモチーフの役目を終えた「ラ・フランス」を喰う。ぼんやりした味がする。（了）

勝手にエッセイ

働く人へ

間々えいよ

幸子さんが、会社を辞めたいと相談してきた。

私も社会人になってずいぶんと経つ。初めのころは、何もかもが新しくて、怖くてドキドキの毎日だったが、慣れてくると嫌なことや、やりたくないことが積もり積もって「会社辞めたい病」が襲ってきた。それが数回起きた時、私は本気で辞めようと決心した。しかし、問題なのがそれを親に言うことだった。案の定引き留められたのだが、私の決心も強く引き下がらなかった。すると「だめだ！だめだ！」と言っていた親が急にささやいた。

「百万貯めたら辞めていいよ。」

「え！」

百万あればしばらくは生きていけるだろうというのが理由だったのだが、私にとって「百万貯めたら自由」というこの言葉がよかった。ひと月十万貯めるとしたら、十ヵ月後には自由になれる。よし、やってやる！瞳の中がメラメラと燃えた。

それからは嫌な言葉を言われようが、ストレスが溜まって肌が荒れようが、トイレで何回泣こうが「百万貯めたら自由、自由、自由」こう言い聞かせてきた。そしてついに通帳の中でゼロが六つ並んだ時、こう思った。

「・・・もう百万貯めたい。」

十ヵ月我慢できたのだから、もう十ヵ月我慢できるかもしれない。数字が増える楽しみを知った私の瞳はすっかり「¥」マーク。恐るべし数字マジック。数字にモチベーションが上がる営業マンの気持ちがわかったわい。

でも本当にそれがよかった。それまでは、働く意味を持たないままでいたので、大きな壁にぶつかると簡単に崩れていた。しかし「お金を貯めるため、自由を手に入れるため」と設定したら、ぶつかってもそれが支えになって何とか乗り越えられた。家族がいる人は「子供のため、妻、夫のため」と働く意味をそこに置くことができるが、私のように意味を持たないでいると、すぐに辞めたいと思ってしまう。もういいや、と投げやりになってしまう。

働く人へ、あなたは「何のために」働いていますか？

わからないと思った人は、とりあえず「お金のために」と設定することをおすすめします。こういう質問を投げかけられたら、大きな夢のようなことを言いたくなるが、本当に「お金のために」でいいと思う。何のための「何」がない人より、絶対に心の支えになるから。そうして一ヵ月、十ヵ月と時間が経つと、自分に余裕が出てきて、仕事の楽しさが見えてくるから。だからね、幸子さん。私があなたに言えることはこれしかないのよ。

「百万貯めたら、辞めていいよ。」

クラシック音楽教養のお時間

天沼　太郎

番外編その4　今年はちょっと早すぎる 2018 年の演奏会

最近涼しくなったなと考えてはっとした。もう 10 月ではないか。

今年は、何故かやたらと海外からいい演奏家がやってきた。国内の演奏家、演奏団体も素晴らしい演奏を行った。もちろん、中には失敗した演奏会、金返せものの演奏会もあったけど、全般にバブル期もかくやと思われる年だった。その話をしたら、バブル期を知る方から、こんなものではないと言われそうだけど。

ちなみに、凄い数の演奏会に出かけているが(演奏会好きからしたら、それでも微々たる数かも知れない)、今年演奏会に出かけた数は例外である。ほとんど桁が違う。それだけ出かけたおかげで、個々の演奏会を十分に鑑賞できなかったかもしれない。そこは要検討。

それはさておき、駆け足で今年の演奏会を、今の内に振り返ってみたい。思えば今年の初め、2018 年を 2017 年と書き間違えないか心配していた。ところがその 2018 年に慣れないうちにもう今年は終わろうとしている。ここで今年聴いた演奏会を振り返らないと、記憶がどこかへ行ってしまいそうだ。今年はとにかく早すぎる。

個々の演奏会については、特に印象に残った演奏会については、後日再度取り上げる。

1 月　(1)　坂入健司郎指揮　東京ユヴェントス・フィルハーモニー

本年最大限の収穫である。今年はもう聴いたことのない指揮者やオーケストラを聴くことはないから、このオーケストラを越える発見はないだろう。

聴いたのは3回。この 2018 年になってから 3 回である。1回目がこのブルックナー交響曲第9番。ブルックナーが死の間際まで作曲を続けた未完の大作である。

演奏は、出だしはちょっと物足りなかった。けれど2楽章、ダダダンダンダンと管弦楽器が一斉にすごい音を弾くところで流れが変わった。そこからは一気呵成である。音楽は上に下に駆け回り、最後の最後、歓喜であり悲しみでもある神の国が現れる。ブルックナーが第4楽章を書き上げられなかったのは痛恨だけど、天界の入り口で扉を開けるところで曲が終わるこの終わり方も実に見事な終わり方ではないか。

ちなみに、2回目多摩でベートーヴェンの英雄を聴いたけど、これは特に印象に残らなかった。駅からすぐ見つかるはずのホールを見つけられず、散々探し回って疲れたのかもしれない。

(2)　カンブルラン指揮　読売交響楽団

コレはハズレ演奏会。とにかくオーケストラが荒いこと。前の週に聴いた坂入健司郎＆ユヴェントス・フィルハーモニーの演奏が余りよかったので、今年はついてる！と、見つけてすぐチケットを

買ったこの演奏会、早速落ち着けと言われたようなものだ。

カンブルランは精妙な音づくりが特徴。バスティーユのオペラハウスで初めて、カンブルランの演奏を聴いたとき、バルトーク「青髭公の城」、1時間強の演奏中、ただの一度も絶叫がないという信じがたい演奏。演奏が終わったとき、それがいい演奏なのか、ただの凡演か分からなかった。でもやがて、これは格別な演奏なのではないかと身震いしてしまった。こんなに見事にオーケストラを統率できる指揮者、世の中にいったい何人いるのだろう？

とはいえ、繰り返すが、音楽として良かったのか悪かったのか、正直分からない。そこで、数年後の日本初公演に大枚はたいて出かけ、やっとそれが尋常でない演奏だと納得した次第である。その後発売されるCDをいくつか聴いたが、澄み切っていながら、盛り上がりゼロのカンブルランしかできない特殊な演奏を体験できる。

けれど、この演奏会は冴えなかった。イケイケで乱暴に盛り上がる演奏。カンブルランらしさの欠片もない。指揮者は一体何を考えていたのだろう？

(3) チョン・ミュンフン指揮　東京フィルハーモニー

前半のモーツァルト交響曲第41番が良かった。最初、テンポ速めで、この速さじゃもったいないと思ったけど全くの杞憂。しっかり耳を澄ますと、音楽の進みとともに、次から次へと世界が広がっていく。その様にため息がでるばかり。何か一つを上げるとすれば、終楽章の第一主題。最後の方で、主題が微妙にずれ、それがそのままフーガになる。その美しいこと。再現部で同じテーマが現れるところ、もうこの世界が終わってもいいのではないかと考えてしまった。
後半はベルリオーズの幻想交響曲。私はこの曲と相性が悪いのかもしれない？十年以上前、アクロス福岡で、同じくチョン・ミュンフン指揮の演奏を聴いた(演奏はパリの放送交響楽団だったか)。指揮者もオーケストラも気合い十分で、地響きする終楽章は圧倒的だったけど、却って興ざめしてしまった。今回も最後まで演奏に入り込めず。

2月　(4) ギドン・クレーメル(ヴァイオリン) リュカ・ドゥバルグ(ピアノ) クレメラータ・バルティカ

これは外れ。ラトヴィア親善大使として、期待の若手ピアニストと自身の組織した楽団を連れてきた演奏会だが、なんと主役以外あり得ないクレーメルが第2ヴァイイリンである。若手を立てたかったのだろうか？しかも、そのクレーメルのヴァイオリンは、音が小さい。もしかして、クレーメルももうお歳なのだろうか。

3月　(5) 井上喜惟指揮　マーラー祝祭オーケストラ

これも失敗演奏会。ただし、こちらは仕事のことで頭がいっぱいになってた私のせいかもしれない。ブルックナーの交響曲3番(それも第1稿)という滅多に聴けない演目だったけど、よく分からず。予習に聴いたインバルの演奏も(いい演奏なのに)ちっとも頭に入らなかった。

4月　(6) マリア・ジョアン・ピリス(ピアノ)

前回の創星に書いたので詳しくは書かないけど、晩年になって(第9作曲前だけど)ベートーヴェンが達した無我の境地がどれほどのものか、芸術家がこんなところまで到達できるのかを(もちろん、素晴らしいのはベートーヴェンではなくてピリスかもしれないけどそれは置いて)、これ以上あり得ないと思える演奏で表してくれた。真面目一徹で生きてきたベートーヴェン、弾(はじ)けるときは凄いのである。

今年聴いた演奏の中で、もし何か一つだけ、再度体験できるというなら迷わずこの演奏を選ぶ。そう思って、大阪まで出かけて失敗した下りは前号参照。あまり書かないようなことを書いておきながら、結構書いてしまった。

7月 (7) オペラ「魔弾の射手」 二期会 ペーター・コンヴィチュニー演出

これまた失敗公演。コンヴィチュニーに期待する「おとぎ話なのに心をえぐる」要素が見つけられず。終演後の拍手に本人が現れず(帰国したのかな)、公演自体に何か問題があったのかなどと勘ぐってしまった。私が演出の肝を見つけられなかっただけかもしれないけど。

9月 (8) 坂入健司郎指揮 東京ユヴェントス・フィルハーモニー

今年3回目の同オーケストラ。曲はマーラーの交響曲第8番。通称が「千人の交響曲」。普通のオーケストラは100人前後。合唱団が入っても300人ぐらいだろう。タイトルからしてキワモノ感いっぱいである。

すばらしい演奏は人の先入観を吹き飛ばす。私は名前に完全にだまされていた。いや、名前を見て、勝手にキワモノと決めつけてのだ。宇宙が鳴り響く様を表すには、それがマーラーの手による交響曲なら、1000人(通常は約500人、今回も約500人)が必須なのだ。それ以外はあり得ないのだ。

話したいことがあれこれあるけど、終曲、「全てのものは神の模倣にすぎない」のところ、音楽がまるで目に見えるように滔々と流れるあの情景(妄想?)を私は決して忘れない。

(9) サイモン・ラトル指揮 ロンドン響

いずれもサントリーホールで3公演。

私の場合、期待した演奏会に外れが多い。期待が変な方向に広がり、演奏者の目指す方向とは違う方向に期待してるのかもしれない。

ヤナーチェックのシンフォニエッタは素晴らしかった。ラヴェルのマ・メール・ロワは、この時も音楽が滔々と流れる(しかも美しい!)すばらしい瞬間があった。

しかしながら、これら以外の音楽に入り込めず。音楽に入り込めなかったのは、私のせいかもしれないし、訴求力のない演奏だったのかもしれない。その両方だったのかもしれない。いずれにせよ、私には縁のな演奏だったのだろうとあきらめることにする。何よりも、ラトルが音楽監督に就任してまだ1年なのだ。これから先、まだまだ音楽が楽しめるなんて、素晴らしいことではないか。

丘と少年

——神さまへの捧げもの

川口　修治

「コスモス」

春に咲いたコスモス
　すき　きらい　すき　きらい
花びらの恋うらない
　すき　きらい　すき　きらい

まってまって　あたし
そんなこといってないわ
すきすきすきって
いってるの　きこえないの

あまりに小さな声なので
子どもたちには聞こえなかった

「天使はどこに」

天使はどこにいる
天の国に
いえいえ柱時計の中に
天使の輪ってどんな色
輝く白
いえいえ麦わら帽子でかくれてる
天使はどこで遊ぶか知ってる
雲の上
いえいえたとえば鯉のぼりにつかまって
泳いでる
天使はどこで眠るの
お母さんの膝まくら
あっ　よく分かったね

「創造主の歌」

見えるのは　せき止められた流れ
今しばらく見とどけて
私は一人　山に帰ろう

重いリュックを捨てて
口笛を吹いて歩こう

時々　鉱石ラジオをつけよう
時間を越えて　とぎれとぎれに
一つの歌が流れよう

星や木や動物たちにも聞かせよう

生きとし生けるものと
ともにあらん

「幻影」――クリスマスの夜に――

雪が光の帯のように
ゆらめく

林は幻影の扉を開く
氷の彫刻となった
少年と少女

ささやき声が拡がる
「ね」
「うん」
「秘密よ」
「うん　うん」
「永遠に誓うの」
「チャペルには入ったことがないんだ」
「ばかね　お話だから想像でいいのよ」

「アーメンって言うんだろう」
「言わないわ」

貧しく老いを待つばかりの男を包んで
雪が降っている

エヘン王国の謎

一路 真実

始まりは、本当に些細なことだった。

「エヘン」

打合せの時に隣席に座った上司が咳払いを始め、それが無性に気になって仕方なくなったのだ。

「エヘン、エヘン」

別に風邪というわけでもなさそうで、咳払いをしたからと言って、何か大声を出すような気配もない。ただ、ずっとエヘンを繰り返している。

エヘン虫の上司は、竹原部長といったが、実はその素性を誰もよく知らなかった。唯一わかっていたことは、社長の肝入りで他の会社からヘッドハンティングされたということだ。赴任した日に、みんなの前で部長が紹介された際、前職は機密性が高く、詳細は伝えられないと話したので、誰もそれ以上は聞けなくなった。

とはいえ、竹原部長はいたって普通の中年のおじさんだ。小柄で小太り。頭頂部は禿げ上がり、申し訳程度に寄せ集められた髪は、ライン上になっている。大きな縁のある眼鏡をかけているため、レンズ

が光って目はよく見えない。時折、ズボンのポケットからぺったんこのハンカチを取り出し、ごしごしと額の汗を拭いている。

私は、仕事のできる上司とはどんなものかと竹原部長を観察することにした。

部長は、会社の食堂で毎日必ず一番カロリーの高い定食を注文する。食後には、一粒のチロルチョコレート。その包み紙は丁寧に伸ばして、机上に置かれた小さな空き箱にしまう。業務中にもかかわらず、引き出しからおもむろに木製の耳かきを取り出して、耳掃除をする。電話が鳴ると、きっかり二回、コールを聞いてから取る。あまりにも小さな声で話すので、誰からの電話で、何を話しているかはわからない。特別に仲の良い部下はいない。ただ、おじさん体型の割には動きが俊敏で、同僚と話をしているといつの間にか隣にいて全ての会話を聞かれていることがある。これが竹原部長の情報通であるゆえんか？　よくわからない。しばらく観察していたが、わざわざ他会社から引き抜かれるほど仕事ができるとは思えなかった。

そんなある日、会社の同期が集まる会が催された。月に二、三回開かれているその会は、情報交換やネットワークづくりなんて勝手に名目を立てながら、実際は単なる飲み会。気の置けない仲間で羽目をはずす会だ。

向かいに座っていた、おじさんフリークの高田が突然言い出した。

「ねぇ、エヘンって知ってる？」

高田がおじさんフリークと呼ばれるわけは、彼女の性癖にある。同年代の男性には全く興味がなく、自分の父親と同じぐらいの年齢の男性とばかり付き合っている。それゆえ、不倫関係になることもしばしばあり、そんな彼女のことをいとおしさ半分、からかい半分で、同期の友人たちはおじさんフリークと呼んでいる。

彼女の華奢な指が握るグラスの中で、血のような赤ワインがぬめっと光った。

「知らない」

私は、とうに泡の消えたビールを口に運んだ。

「エヘン虫？」

そう問うと、高田は頷いた。

「誰もがつい依存してしまうものよ」

高田は、酔っているのか、焦点の合わないような目をして、またワインを揺らした。私は、今度は生唾でごくりと喉をならした。

「麻薬みたいなもの？」

「エヘンが何かは誰もわからない。ただもう気づいたときにはそこにあって、自然に人々の中に浸透し、蝕んでいくものなの」

高田は不敵な笑みを浮かべたかと思うと、それからいくら尋ねても、もうエヘンの話はしてくれなかった。

「ただいま」

真っ暗な部屋にそう呼びかける。パチンと電気を点けても、誰もいない。

「ただいまってばぁ」

机の下やソファの上を見て回るが、いない。

すると、ドアの陰に灰色の猫がじとっと座っていた。
「わ、そこにいたの」
ゆっくりと瞬きしながら、猫は細い月のような瞳でこちらをじっと見つめた。
ソファに腰かけると、そろりと膝に乗って丸くなったので、背中の整った毛をさわさわと撫でた。
「ねえ」
呼びかけてみても、猫は目をつぶって答えない。
「なんでそんなにかわいいのかなぁ」
反応はないが、毎晩こうして呼びかけるのが日課だ。すましているように見えるが、温かい体からはジージーとねじを巻いているような音がしてきて、喜んでいることがわかる。一層うれしくなって、こちらも背中を丸めて毛の合間に鼻をうずめる。
ただ、幸せを感じる一方で、猫の喉を鳴らす音だけが響く部屋が、急に侘しいものに感じられた。
「これが依存ってことなのかな」

高田の言葉をふいに思い出し、長い嘆息をもらした。
請求書の束を前に、ひたすら電卓を叩きながらパソコンの入力を続けているが、集中力が切れると数字が合わなくなってくる。いらいらして机に置いていたコーヒーを手に取ると、別の係の若い社員が話をしているのが自然と耳に入ってきた。
「昨日、めっちゃ金使った」
「新しいゲーム始めたんだっけ？」
「マジおもしろいけど、最後でどうしてもクリアできないからさ。ついアイテム買わせるような仕組みになってるんだよ」
毎日よくゲームの話をしているなと思っていた。仕事しろ、と心の中で呟きながら、ペンを手に持ち、合わない数字にしるしをつける。若い社員たちはまだゲームの話を続けている。
「今度、あれのスマホ版がリリースされるだろ。楽しみだよな」
「そうそう、エヘンエヘン」
「エヘンエヘンエヘン」

あれっと思って、振り返ると二人は変わらず、「また課金しちゃうなあ」と笑い合っていた。聞き間違いかと思っていると、遠くから竹原部長がこちらを見ているのに気づいて、慌てて請求書に目を落とした。

「多賀子」
会社を出ると、すぐに呼び止められた。ロータリーのベンチで、高校の同級生だった真紀子が手を上げた。
「どうしたの？　久しぶりじゃん」
口角を上げて言ったつもりだが、内心は真紀子がどうして待ち伏せしていたのか不審に思っていた。
真紀子は、薬剤師だったが突然務めていた病院を辞めたのだと、同窓会のときに話題になっていた。
「真紀子って覚えてる？　丸い眼鏡かけたおとなしい子」
懐かしいクラスメイトの面々が集まったテーブルで、誰かが言い始めた。
「ああ、何か病院辞めたらしいな。フリー

のジャーナリストになるとか言って」
「もしかして医療系のライターとか？」
　真紀子が同窓会に来ていないことを良いことに噂話がまことしやかに囁かれる。そうやって楽しむ場なのだ。
「普通はそう思うじゃん。実は違うらしいよ」
「えっ、なになに」
「都市伝説やＵＦＯ、心霊写真とかさ、そういう怪しいコラムを書いてるんだって」
「それ、マジなやつじゃん。怖っ」
「そういえば、真紀子って真っ黒な長い髪でさぁ。貞子っぽかったよね」
　井戸から出てくるポーズをする同級生を見て、嘲笑でみんなが沸いた。
　そんな同窓会のことを思い出しながら、真紀子の姿を懐かしく見ていた。卒業してからもう十年以上会っていなかったのに、当時とあまり変わっていない長い黒髪と丸い眼鏡ですぐ真紀子だとわかった。
「あんたの上司のことだけど」
「えっ、誰？」
「竹原さん」
　真紀子の口から部長の名前が出てきて驚いた。
「知ってるの？」
　質問には答えないまま、真紀子はどんどん話を続けてくる。
「あんたの上司って、変な時期に入社したわよね」
「ヘッドハンティングされたって聞いたけどね」
「変わったところがあるんじゃない？」
「変わったところって？」
　眼鏡の奥で、大きな瞳が光ったような気がした。
「あの人は、エヘン王国の国王なのよ」
　その言葉に思わず息をのむと、その様子を窺っていた真紀子が、突然不気味な声を出して笑った。
「あんたも気づいてたんでしょう。エヘンの存在に」
「知らない」
　否定してすぐに駅の方へ歩き始めると、真紀子も駆け足でついて来た。
「竹原部長の何が聞きたいの？　私は何も知らないよ」
　追い払うようにそう言うと、真紀子は息を切らしながら懇願した。
「エヘン王国のことが知りたいの」
「エヘンって何？　変なこと聞かないで」
　ヒールがカツカツとリズムよく地面を打つ音が鳴る。おじさんフリークの高田やエヘンエヘンと会話する男性社員のことが頭をよぎる。私の周りでエヘンが増殖している。確かに何かがおかしい。
　ふいに足を止めると、真紀子が目の前に回り込んだ。私は真紀子をまっすぐに見つめて言った。
「竹原部長だけじゃなくて、他の人もエヘンって言ってる」
　真紀子は頷いて口を開いた。
「私が調べたことを教えてあげる。その代わり、竹原さんに取材させてほしいの。呼び出してくれない？」
　誘われるように、真紀子と二人で近くのバーに入った。暗がりの中では、真紀子はよりおどろおどろしい雰囲気をまとっている。まるで何かに取り憑かれている

ようにも思えた。
何杯か派手な色のカクテルを飲んだ後、しびれを切らして、真紀子に尋ねた。
「エヘンは依存だって聞いたわ」
真紀子は目を見開いたかと思うと、ゆっくりと眼鏡を持ち上げた。
「エヘンは中毒性のある何かなのよ。ただそれが何かは私もわからないし、どうやってできているかもわからない。私が思うに、おそらくそのエヘンに感染させるために竹原さんはこの世界に来たのよ」
真剣に話している真紀子に悪いと思ったが、思わず吹き出した。
「まさか。宇宙人ってこと？」
真紀子は笑われたことに怒ったのか、眉間に皺を寄せた。
「人間ではないわね」
明らかに普通のおじさんである竹原部長を思い浮かべてふっと笑いがもれ、慌てて口を抑えた。その様子をじっと眺めながら、真紀子は言った。
「信じなくてもいいわ。あの人に聞けば全てわかる。ねえ、お願い。このままだと、人類はエヘンで滅亡してしまうかもしれないのよ」
そんな壮大な話をにわかには信じがたかったが、真紀子のまじめな顔にとりあえず理解を示すことしかできなかった。
結局のところ、真紀子と竹原部長を会わせることはなかった。真紀子が忽然と消えてしまったからだ。
何度電話しても繋がらず、変だなと思い始めた頃にルームメイトという人物から真紀子が行方不明だと連絡をもらった。
「真紀子が最後に会ったのは、多賀子さんなんです」
喫茶店で待ち合わせをした彼女は大柄で、派手なピンクの髪色をしており、真紀子と仲が良さそうなタイプとは思えなかった。
「財布も携帯電話も、すべて家にあるんです。まるで真紀子だけが消えたように。家出だとは思えないのに、警察は動いてくれません。仕事の性質上、海外に取材に行ったのではないかって言うんですよ。そんなわけないじゃないですか」
彼女は机を叩いた。ガシャンとコーヒーカップが揺れた。
「真紀子と会ったとき、何か言ってませんでしたか？」
「何かって？　別に家を出るとは聞いてないけど」
「真紀子が何か大きなネタを握っているとか、そういうことです」
一瞬、竹原部長の顔が浮かんだ。
「最後に何を話したんですか？」
彼女の真剣な表情に、少したじろぎながらコーヒーを一口飲んだ。
「ねえ」
喉の奥で呼びかけた。
「エヘンって知ってる？」
「えっ、何ですか？」
喫茶店にいる周りの客の会話がゆがんで聞こえてくる。
「エヘンエヘンエヘン」
「エヘンエヘンエヘン」
見回すと、全員がエヘンと言っていた。
「多賀子さん、お願いですから真紀子を

……エヘンエヘンエヘン」

彼女の濁った視線は私を通過して、どこか遠くのエヘン王国を覗き見ているようだった。私は背筋が寒くなり、慌てて荷物を持つと彼女を残して店を出た。向かってくる人の間をすり抜けながら駆けていく。すれ違う人たちがみんなエヘンと言い続けている。

「あの服、かわいくない？　こっちの服も。エヘンエヘン」

「今度の合コン、女子大生だろ。先週の合コンと同じ店でいっか。エヘンエヘン」

「この前から始まったアニメ見てる？　あのドラマは？　エヘンエヘン」

「この国は腐っています。それを正すのは我々の政党です。エヘンエヘン」

「エヘンエヘンエヘン」

横断歩道で信号待ちをしている人が、みな下を向いてエヘンを繰り返している。携帯電話の小さな画面をみんなが背中を丸めて覗き込んでいる。エヘンエヘンの大合唱が街を包み込んでいく。

「何なのよ、これ！」

エヘンの波に飲まれないように、通りを夢中で走って行く。あてもなく、どこに行けばいいかもわからないけれど、ひたすらに走る。

カラフルな花が並べられている生花店の角から、急に人が飛び出してきた。

「わっ」

抱きつくような格好になり、熱い肉の塊に押し返された。

「竹原部長！」

いつものようにハンカチで額を拭きながら、竹原部長は小さな声で言った。

「怖がらなくていい」

その時、初めてちゃんと部長の声を聞いた気がした。

「みんな、エヘンって言ってるんです。竹原部長がやったことなんですか？」

部長は首を振った。部長の背後に隠れるようにいたのは、真紀子だった。

「多賀子、もういいのよ。竹原さんはエヘンで人類を滅亡させたいわけじゃなかったの」

「どういうこと？」

エヘンの大合唱が近づいてきていた。

「ねえ、早く。早く逃げないと、私たちもああなってしまう」

私がそう言うと、竹原部長が掌を向けた。

「だから、心配しなくていい」

赤くなっていた西の空が、絵の具をこぼしたように、どんどん漆黒に染められていく。

「闇が来る」

私がそう呟くと、竹原部長は人差し指で西の空を指した。すると、瞬く間に白い光が射し、宙に大きな貝のようなものが現れた。貝が開くと、そこには高田が乗っていた。

真紀子が言った。

「竹原さんは、エヘン王国を滅亡させないために、エヘンを求めてここに来たのよ」

竹原部長は高田に掌を向けて合図を送ると、高田は長いホースのついたパラボラアンテナのような機械を広げた。

「人々の中に溜まったエヘンを吸収する

の。エヘン王国のエネルギー源であったエヘンは、もう王国だけで賄えなくなった。でも、エネルギーがないなんて国民に言えるはずもなく、国王自ら極秘で来たんだそうよ」

人々のエヘンがどんどん吸収されていく。だんだんエヘンの声が小さくなっていく。

「あそこに乗っているのは、同期の高田よ。どうして高田が手伝ってるの」

「彼女は王妃になるのね」

「えっ、エヘン王国の王妃？」

「王妃が決まらないのも王国存続の危機だったみたいよ。一石二鳥ね」

すべてのエヘンを吸い取ると、また辺りが光った。竹原部長は空を飛び、貝に乗って空の彼方へ消えた。

夕暮れの町並みが戻ってきて、通りを歩く人々は普段と変わらない様子でおしゃべりをしていた。

次の日、会社では竹原部長がまたヘッドハンティングされて、別の会社に移ったらしいという話で持ちきりだった。そして、同期の間ではおじさんフリークの高田がこっそり寿退社したと話題になった。お祝いを言いたくても高田と連絡がつく者は誰もいないし、相手がどんな人かもわからない。でも、きっと年の離れたおじさんだろうということはみんなよく知っていた。

そして、私は真紀子としばしば食事に出かけるようになった。時々は、あのピンク髪の同居人も一緒に。

「多賀子」

会社の前まで迎えに来ていた真紀子は、髪をばっさり切っていた。

「あれも一種のエヘンね。私の中では、髪を切らない方が人生がうまくいく。ジンクスだったのよ」

「結局、エヘンって何だったんだろう？」

真紀子はくすっと笑った。

「依存しなければ生きていけない、弱い人間の心に棲みつく何か。竹原さんは、人々をエヘン中毒にして培養し、それらを抽出した。今となっては、それだけしかわからないわ」

私たちは並んで、真っ暗になった夜の街を歩いた。ライトアップされた通りをカップルがうっとりと眺めている。

「だったら、私たちのいる世界からエヘンがなくなることはない。竹原部長も高田も、またいつかエヘンを集めにやって来るだろうね。逆に、エヘン王国はエヘンが培養できないほどに、誰もが自立している素敵な国なのかもしれない」

私がそう言うと、真紀子は驚いたような表情で見つめてきた。

夜の喧噪の中で、私は少しだけ高田のことがうらやましくなったのだった。

エヘンエヘン、エヘン。

（了）

編集後記

編集後記

一路 真実

今号は十周年記念号と平行して作りました。やっぱり印刷所に頼んだ方が楽だなと思うのですが、大変な製本作業があってこその創星という気もしています。

間々えいよ

今年があと数ヵ月で終わります。こんな感じで人生あっという間に過ぎるんだろうな。
やりたいこと、やろうっと！

松田 定幸

今号から、星の擬人化ならぬ擬獣化イラストをシリーズでお送りします。
どうかよろしく。

川口 修治

「丘と少年」は自分の好きな詩です。今はなかなか詩が書けませんが、その頃は詩の時だったんだなと思っています。

衣 空

今、行ってみたい映画館が日本に3館あります。東京のアップリンク、大阪の第七藝術劇場（通称ナナゲイ）、高知のウィークエンドキネマMです。

天沼 太郎

ペリー・ローダンの新作を読み始めました。
SFの好きな方にオススメです。

甲斐 聖子

詩を書いています、よろしくお願いします。

紫雲 夜想

今回は詩を書いてみました。妄想を頑張って形にしてみました。（孤高の存在である堕天使の）彼が、とある女性への想いをささやかにそして熱く表現する様を書き起こしました。sida A（女性目線）はいずれ書くつもりですが、今はまだありません。作品ができたらこちらに載せるつもりなので、よかったら読んでやって下さい。

To’s job

図版ばかり掲載していたのですが、これからは文も添えます。

星屑書房は、好き勝手に表現を行う文化系サークルです。
自己表現の場をつくっています。
いつでもメンバー募集中☆
ワークショップ「表現のまなび屋」の参加者も募集しています！
気軽にお問合せください☆

星屑書房 STARDUST BOOKS

STARDUST SCHOOL 表現のまなび屋

奥付

【表現のまなび屋】一路真実の小説ゼミのご案内

星屑書房は、誰でもが表現活動に親しめるようなワークショップ「表現のまなび屋」を開催しています。小説ゼミは、小説等を書いている人同士で意見や感想を話し合い、伝わる文章を書くために互いに学び合う講座です。

日時：平成３０年１１月１７日（土）　19:00～21:00（18:30 受付開始）
場所：福岡市ＮＰＯ・ボランティア交流センター　あすみん
　　会議室（福岡市中央区今泉 1-19-22 天神クラス 4 階）
参加費：500 円（要申込）
　　※詳細は星屑書房のホームページでご確認ください。

★special thanks★創星配布協力店等のご紹介
ジュンク堂書店福岡店、福岡市東図書館、宮若市立図書館、Ambient、Cafe & Gallery　フッフール、FREHAKO!、MOOK、６次元、ONLY FREE PAPER、ヴィレッジヴァンガード津田沼パルコ店、星時、只本屋、はちみつとフリーペーパーのお店『はっち』、MUJI BOOKS 岡山ロッツ店、紙楽社、シアター・シエマ、くまもと森都心プラザ図書館、大分の雑貨屋 CochoCocho（まちかど出版ぼえまるブース）
※お店等に置かれていない場合は、星屑書房へお問合せください。

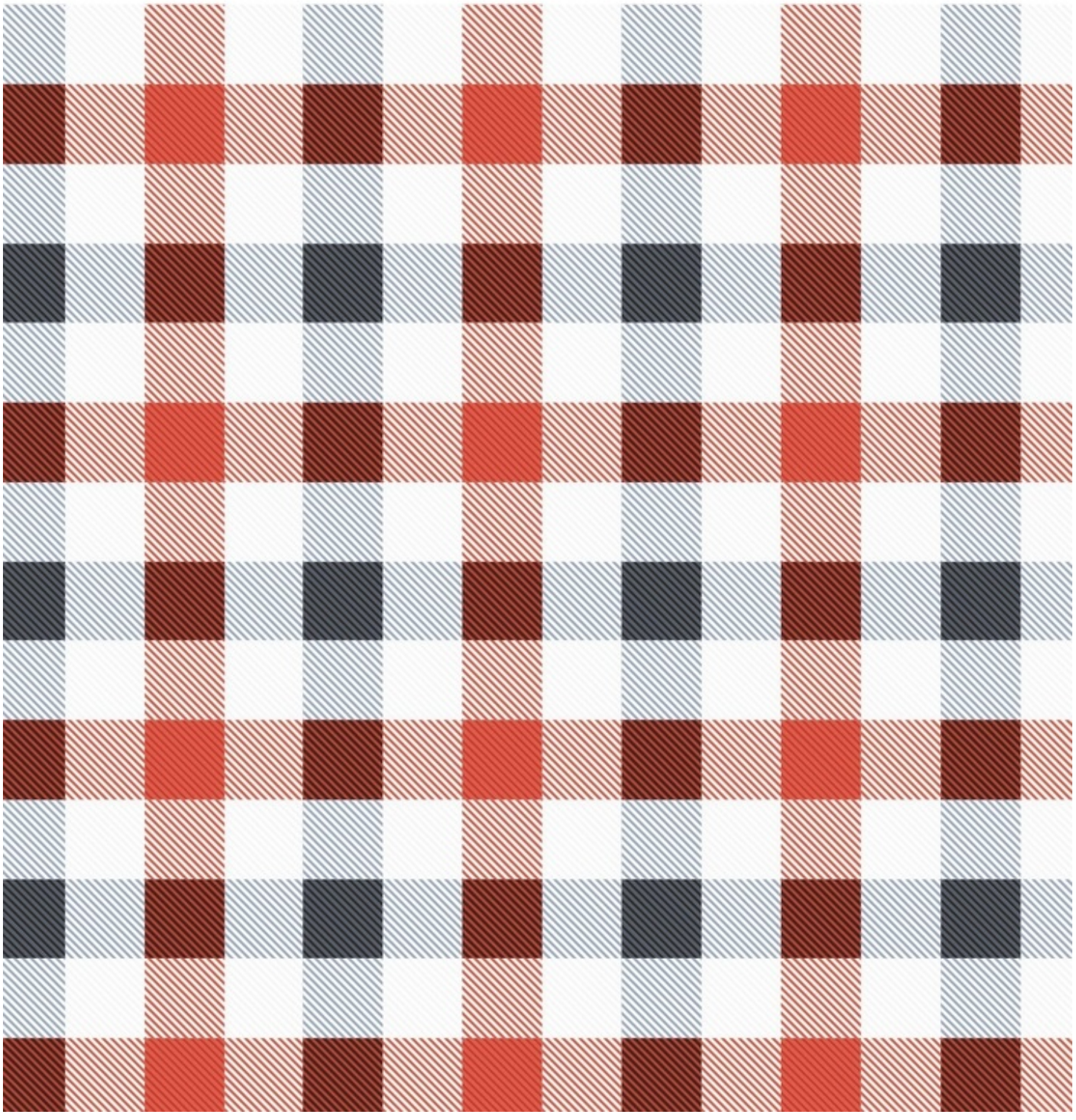
創星　第 18 号

2018 年 10 月 14 日　初版

発行元　星屑書房

https://stardustbooks.jimdo.com/

©2018 STARDUST BOOKS, Printed in Japan.
本書を無許可で複写・複製することは，著作権法上での例外を除き，禁じられています。

裏表紙

星屑書房
STARDUST BOOKS